いつも心に川がある
堀川まちづくりの会企画展

舟運・筏・川遊び 堀川のにぎわい

庶民の舟遊び

風流な月見船

『尾張年中行事絵抄』には住吉神社の祭礼について「今宵、神楽あり。此社は、船乗どもの信仰多くして、献燈数多あり。堀川の月見ぶねに、一しほ賑々し」とあり、たくさんの月見船が出ていたことがうかがえる。

同書に掲載の「後之月見」〔旧暦9月13夜の豆名月〕という絵には、暗い堀川の水面に提灯を灯した屋形船や、何隻もの小舟が浮かび、なかには三味線を抱えて乗船している婦人も見受けられる。

後之月見　尾張年中行事絵抄（東洋文庫蔵）

芭蕉の弟子で名古屋俳壇の重鎮であった山本荷兮（かけい）が編集した『俳諧昼寝種（はいかいひるねのたね）』（元禄7年頃刊行）に、堀川を月見舟で下った時の俳句が掲載されている。薪を陸揚げして空になった艀に乗り、堀留（現：朝日橋）から呼続の浜（現：南区呼続）まで俳句を作りながら月を愛でた。

堀留では「すむ月や水の落合の鹽とまり」、五條橋では「開帳の札に休らぬ月夜哉」、白鳥で「人のちからおそろしい哉木場の月」、熱田で「てる月や伊勢志摩三河美濃近江」など、月の光に照らされた堀川端の景観が詠まれている。

カラオケ・トイレ付きの遊覧船？

静かに俳句を楽しむ人もいれば、賑やかに騒ぐのが好きな人もいる。文政元年（1818）になると、雪隠付きの屋形船が堀川で運航されるようになった。最初にできたのが「初音丸」だが、評判が良いので「恵方丸」も造られた。笛・鼓・太鼓を備え付けており、乗客が打ちはやしながら堀川の風光を楽しんだという。今のカラオケ・トイレ付き遊覧船といったところだ。貸し切りで1日20匁。更に新しい船を造る動きもあると記録されている。

春爛漫の花見船

文化年間(1804～18)に、日置橋の南北に桃と桜の苗木が植えられ、堀川は名古屋きっての花見の名所になった。川岸や橋の上からの花見も良いが、水面から見上げる花見船からの景色は格別の味わい。シーズンになるとたくさんの舟が堀川に繰り出した。

堀川花盛　尾張名所団扇絵

堀川花盛の絵には、屋形船や小舟が堀川に浮かび、人々が花を楽しむ光景が描かれている。男も女も、老いも若きも、花を見て心が浮き立つことに変わりはない。ゆったりと船中で春風にそよぐ花を楽しむ人もいれば、舳先や屋根で花を眺める人もいる。筏師も仕事の手を休めてひとときの憩いを味わっている。左端の舟からは湯気らしいものが立ちのぼっているが、花見船に料理を売る煮売り船だろう。水面を見ると、花見酒を飲み過ぎたのか、元気のいい若い衆が堀川に飛び込んで泳いでいる。

明治の半ばまで、花見船が堀川に出ていた。坪内逍遙は名古屋で暮らした10代の頃の思い出を次のように書いている。「河下の両岸に植附けられて年を経た桜の老木は中々見事で、堀河の花見といふ江戸の向島のそれ扱ひ、私が11～2から14～5頃までは、折々父母と共に屋形船なぞに乗つて、見に行つたのを思ひ出す」